

動詞述語文における中間的複合動詞の カテゴリー

李 暲 洙*

目 次

1. 動詞述語文のカテゴリーとは
2. 動詞と動詞の結合構造に現れる形態的特徴
3. 文法的複合動詞に含まれる中間的複合動詞
4. 文法性と語彙性を共有した中間的複合動詞
5. まとめ

1. 動詞述語文のカテゴリーとは

現代日本語の研究における述語文¹⁾に関しては様々な角度から研究されている。その中でも、名詞述語文と形容詞述語文に関する研究よりも動詞述語文²⁾に関するものが注目をされている。その理由は日本語の動詞の意味用法が多様であり、動詞と関わる働きが大きいからである。廣義には、動詞述語文のカテゴリーは動詞と関わるものとして、形態論、意味論、文法論等がここに含まれる。狭義には、文法的なカテゴリーと動詞の意味に関する研究、動詞の結合に関する研究（複合動詞と補助動詞）、格と関わる研究、連語論、ボイス（受動と使役）、テンスとアスペクト、文のムード型式、述語の類型と性質など複雑な形態変化等の研究がある。動詞述語文に関する研究は動詞を述語とする廣範囲な文の意

* 韓國放送通信大學校 助教授 日本語學

- 1) 益岡(2000)は、述語の類型として品詞の區別に基づき動詞述語、形容詞述語（ここでの形容詞は、いわゆる「形容動詞」を含む）、名詞述語（名詞句＋判定詞「だ(です/である)」）を立てている。
- 2) 日本語動詞述語文に関する代表的な研究は森山(1988)の「日本語動詞述語文の研究」がある。

味での類型が基本となる。日本語文法の統合的な分析と記述を目標としているのが動詞述語文の基礎研究段階であるといえるだろう。統合的な分析と記述に関わるものの一つとして複合動詞が挙げられる。複合動詞の研究の形態的特徴は語の結合形式によって見られる形態的变化と関わるものであり、統語的特徴は動詞と関わる内的要因と外的要因によるものである。複合動詞の形態的特徴と統語的特徴の個別的な研究は数多く行われているが、全体的な枠組みの中での定立はまだ不透明なところが多々存在している。また、本動詞と複合動詞との關聯性の問題、動詞の意味が具体的なものから抽象的なものへと変化していくプロセスなどをベースに複合動詞の研究をし、複合動詞そのものの意味用法に限定せず研究を進めていけば、今まで明らかにされていなかった複合動詞の本質が明らかになると思われる。特に、文中での統語的特徴を基本に研究を行えば、動詞述語文において複合動詞の實體がある程度把握でき、これまで糾明されていなかった中間的複合動詞の解明も可能となるであろう。述語文の中で何よりも重要なのは動詞と動詞の結合表現ではあるが、前項動詞にどのような動詞が来るかによって後項動詞の意味も変わり、前項動詞が同じであっても文脈によって意味が異なる場合もある。これらはどのような文の中で動詞が使われるかによって意味と働きが異なってくるからである。さらに、複合動詞は語彙的に構成されたものと文法的に構成されたもの、その上、中間的性質の複合動詞が存在しているといえる。しかし、中間的性質に関する複合動詞の研究はまだ意見が分かれている。よって、本稿では中間的性質の複合動詞は存在しているか、存在しているとしたらどのようなものであるか、その働きかけは何であるか、どのような種類があるか、中間的複合動詞のカテゴリーに関して述べていきたい。

2. 動詞と動詞の結合構造に現れる形態的特徴

語と語の関係を論ずるとき、基本となるのは動詞と動詞の結合関係である。動詞と動詞が組み合わされるとき、動詞そのものの性質によって意味と働きが異なり、本動詞の單獨用法の意味と重なるものもあるが、全く異なる意味となる場合もある。例えば、現代日本語における「飲みすぎる」「書きまくる」「言いきる」「食べつくす」のように二つの動詞が組み合わさったとき、「前項動詞³⁾の連用形(マス形)」と「後項動詞」との結合による形態がこれに属す。このように動詞と動詞を組み合わせで形成された動詞は文中での

3) 日本語の動詞は語幹と語尾で明確に二つに分けられる。日本語の動詞において語形変化を起こす部分を語尾(ending)といい、語形変化を起こさない部分を語幹(stem)という。すなわち、前項動詞の連用形(マス形)をいう。また、本稿では、前項動詞「だす」は「だす」と表し、後項動詞「だす」は「-だす」と表す。

使用度は高いといえる。例えば、次の二つの文を挙げてみる。(1)の文は大江健三郎の「死者の奢り」の序文の初めの文であり、(2)の文は「死者の奢り」の最後の文である。

- (1) 死者たちは、濃褐色の液に浸って、腕を絡み合い、頭を押し付けあって、ぎっしり浮かび、また半ば沈みかかっている。(死)
- (2) 僕は勢いよく階段をかけ降りたが、僕の喉へこみ上げて来る、はれきった厚ぼったい感情は、飲み込むたびに執拗に押し戻して来るのだ。(死)

複合動詞は(1)の文では三つ、(2)の文では五つ使われていることから分かるように文中に使用される複合動詞は種類も意味も多種多様である。次に、複合動詞と関わる形態的特徴を調べていく。

- (3) 放っておいたら、自分までがみじめな立場に追いこまれる。(愛)
- (4) 東方における戦況が瓜州城へ伝えられ始めた。(敦)
- (5) その後は庄吉さんも重松も大池へ約束に行くのを見合わせた。(黒)
- (6) さて私は大野をインタビューしたとき、この試合を持ち出した。(新)
- (7) この敗戦後の軍人の惨めさを、私は次兄を通していやというほどみせつけられた。(道)
- (8) ひしゃくを中に、つつこんで、汲み出し始めたのだった。(窓)

(3)の「追いこまれる」は「追う」という動詞の語尾「u」を「i」に変え、後項動詞「こむ」との組み合わせに受身の形が付け加えられ「追いこまれる」になっている。しかし、(4)の場合は、前項動詞の連用形に受身の形が組み合わさった「伝えられ」に後項動詞「始める」が結合され「伝えられ始めた」の形になっている。(5)は前項動詞「見る」に後項動詞「合わせる」が組み合わされ「見合わせた」になっており、(6)のは複合動詞でよく見られる前項動詞の連用形に後項動詞が組み合わさり「持ち出した」になっている。(7)は「見せる」は前項動詞の連用形に「つける」の受身の形が結合され「見せつけられた」の形になっている。

ここで興味深いのは(3)–(7)は二つの動詞の結合で成り立っているが、(8)の場合は二つ以上の動詞(くむ+だす+はじめる)で成り立っているという点である。これは一固まりの複合動詞でない可能性が高く、結合力が弱いものであるといえる。二つ以上の動詞で成り立っている場合、最後の動詞はほとんどが決められている。李(1977b)の調査によると、開始(はじめる、だす)、継続(つづける)、過剰(すぎる)、可能(える)などである。このような類は一固まりの語彙的なものというより文法的性質の強いものであるといえる。この複数回の動詞の結合の可能性は森山(1988)でも統語的複合動詞の可能性について指摘されている

。このように、複合動詞の内部構造から分かる形態的特徴⁴⁾は大きく二つに分けられる。一つは、複合動詞の内部に文法現象が見られる場合(文法的複合動詞⁵⁾)であり、もう一つは複合動詞の内部で文法的な現象が見られず、語彙的に固まって使われている一固まりの複合動詞(語彙的複合動詞)である。

3. 文法的複合動詞に含まれる中間的複合動詞

文法的複合動詞の下位区分の設定基準は以下のように決められている。これらの基準については森山(1988)、影山(1993)、李(1998)におけるtest frameの設定を通じて具体的に論じられている。影山、森山、李の共通的な基準は、前項動詞と後項動詞の間に文法的要素の挿入が可能であるかどうかである。その他、それぞれ特異な点は、森山(1988)は二つ以上の動詞の結合の可能性の有無に關する点、影山(1993)はパラフレーズの可能の有無による問題、李(1997a)は前項動詞と後項動詞の分離の可能性の問題⁶⁾が挙げられる。さらに、影山と森山は代形が可能であるか否かも重要な手がかりになっているといえる。早くから山本(1983)は複合動詞の構成要素の間の意味関係を文中から考察・分類し、複合動詞のアスペクトの有無を基準に區別している。これには意味的に異なる二つの意味用法が存在していると指摘している。例えば、後項動詞「だす」には「つまみ出す」類と「泣き出す」類があり、前者は内部にあるものを外へ移動する「外への移動」の意味が強いが、後者は中にあるものを外へだすのではなく、「泣くことを始める」という「開始」の意味が強い。すなわち、「泣き出す」を時間的なアスペクト⁷⁾と取り扱っているのである。前者は

4) 寺田(2001)は複合動詞の形成と言語的特質を言語間におけるパラメタの存在として論じている。一つは動詞と動詞の結合形を許す言語と許さない言語で分けている。前者に屬するのが韓国語、日本語、中國語、タイ語であり、後者に屬するのが英語、フランス語、スペイン語である。

5) 森山(1988)では文法的性質の強いものを統語的複合動詞と命名し、語彙的性質の強いものを語彙的複合動詞と命名していた。しかし、(2000)の「ここからはじまる日本語文法」では文法的な構成として自由につくられるもの(生産的:歩きつづける)と、語彙的なもの(自由に生産できないもの:押しつづける)との區別を強調している。そして、前者を文法的複合動詞と定義し、後者を語彙的複合動詞と定義している。この用語は筆者、李(1997b)が學位論文「日韓兩國の複合動詞に關する研究—文法的複合動詞を中心に—」で使用し始めたものである。

6) 李(1997b)は、二つの動詞が組み合わさった複合動詞が文中で後項動詞を除去したとき、文が成り立つのかどうかを基準として一固まりの複合動詞であるか否かを分けている。このように二つの中間的性質を同時に持っているものを中間的複合動詞と定義したのである。

7) 影山(1993)では「だす」「かける」は生産性が大変高く、本動詞の語彙的特性が複合動詞に何の影響も及ばないとしている。すなわち、アスペクトで表した場合、本動詞と關わらず抽象化されたものだとしているのが筆者の考えとは違っている。例えば、「店をだす」という本動詞の意味は營業を開始するという開始のアスペクト的意味があるから本動詞と關聯があると言える。

語彙的の性質が強い動詞結合である反面、後者は文法的性質が強い動詞結合であると見ている。前項動詞と後項動詞の間に文法的要素の挿入が可能なものはすべて開始の意味しかないという。文中から把握するのがより整合性があると思われているが、「泣き出す」のように動詞そのものを見て分かるものも存在しているのである。後項動詞は、アスペクト的な意味⁸⁾だけを持っているもの、アスペクトの意味を持っているものと持っていないものを共に持っているものに二分される。前者は「-はじめる」「-つづける」「-おわる」「-おえる」、後者は「-だす」「-かける」「-かかる」「-あがる」「-あげる」「-きる」「-ぬく」「-つくす」などである。複合動詞の内部構造の文法現象は必ずしも同一ではなく、後者のように前項動詞の連用形と後項動詞の結合には文法的な性質を持っているものと持っていないものがある。文法的複合動詞の基準となるのは二つの動詞の間に文法的要素の挿入が可能であるか否かが重要な基準となる。例えば、

(9) 村を出てから私はひたすら走りつづけた。(わ)

(9') 村を出てから私は(子供たちを)ひたすら走らせつづけた。(わ)

(10) 島國のこたばの感性をもってアメリカ大陸へ渡った司馬さんだからこそ、英語では描かれない「アメリカ」を展く。男どもの聲が、三方から、留奈に浴びせかけられてくる。(愛)

(11) 「もしもし」と、優しい女の聲が呼びかけた。(W)

(9)の「走る+つづける」間に文法的要素の一つである「使役形」を挿入させることができれば文法的性質の複合動詞とみなすことができる。すなわち、(9')「走らせつづける」のように前項動詞と後項動詞の間に文法的要素の挿入ができる。この文は、主体の変化はあるが、自然な文である。また、(10)(11)のように後項動詞が同じ「かける」だが、(10)の場合は文法的要素挿入が可能な場合であり、(11)はそうでない場合である。このように文法的要素の挿入の不可能な類は「話しかける」「出かける」「働きかける」のような一固まり動詞であり、いかなる文法的要素も挿入することが出来ない。

よって、文法的性質と語彙的性質を共に持っているのが(10)(11)の「かける」である。筆者は「かける」のように両方の性質を持っているものを中間的複合動詞として取り扱うことにする。

森山(1988)も早くから統語的複合動詞の設定基準として部分的に一致するものとし

8) 城田(1998)はこれらの観点と異なり、動作相の接尾語(後項動詞に当たる)を様態相(動きの様態を表す)と段階相(動きの過程段階を表す)でわけており、複合動詞が動作のどの段階で来ているのか、また、動作がどの様態を表すのかによって動作相と段階相に分類している。動作相の体系としての段階相は「始まりの段階相」「終わりの段階相」に分類され、様態相は現在のモダリティとはまったく異なる形態で表わしているのは注目に値する。

ものがあることに気が付き「きる」「つくす」などを中間的なものであると指摘している。この中間的ものを半統語的複合動詞⁹⁾と言い換え、複合動詞を統語的複合動詞と半統語的複合動詞と語彙的複合動詞に分けているのである。一方、影山(1993)は統語的複合動詞の基準を主語尊敬と受動挿入の可能性に分けて見ている。しかし、兩者とも「きる」「つくす」のように「終結相」を表す複合動詞にも受動や使役の文法的要素の挿入が不可能であるから中間的なものは存在しないと言っている。しかし、森山は文法的要素の挿入は不可能であるが、他のtest frameに適合する面があるので、中間的なものが存在するとしている。一方、影山(1993)は森山(1998)の半統語論的複合動詞の主張を短絡的であると反駁し、否定している。これは、日本語の開始相と継続相には受身の挿入が可能であるが、終結相の一つである(？やかれきる)のようなものには受身の挿入が不可能であるので、中間的複合動詞は存在しないと言いきっているためである。

しかし、(？やかれきる)は不可能であっても「冷やされきる」「規定されきる」のように文法的要素の挿入の可能なものが存在しているので、(？やかれきる)のような終結相には文法的要素の挿入は不自然というtest frameは再考すべきである。

- (12) クーラーで冷やされきった身体のまま直射日光を浴びなければならぬ不快感。(来)
 (13) モダリティ的な表現のすべてがこれにつき、規定されきるわけではない。(モ)
 (14) 黙って突っ立っているだけのさりげない表情にも、計算されつくした演技があるのだろう。(天)

森山(1998)は基本的に終結を表す複合動詞には文法的要素の挿入が不可能であると論じているが、そうではないものが上の(12)(13)の例である。先行研究でも文法的要素の挿入が不可能であるものとして扱われている「きる」「つくす」は文法的要素の挿入が可能なものとして存在しているのでこれらの取り扱いについても再考する必要がある。したがって、このような類を動詞述語文において中間的複合動詞というカテゴリーとすることができる。すなわち、このように文法的要素の挿入可能なもの(「苛まれます」「冷やされきる」「計算されつくす」「襲われかける」と挿入の不可能なもの(「おもいだす」「はりきる」「うちつくす」「呼びかける」)の存在を認めるべきである。このように、兩者の性質を持っているものを中間的複合動詞というカテゴリーとして設定することができる。

中間的複合動詞には「まくる」も含まれる。動詞と動詞の間に文法的要素(grammatical component parts)である「(ら)れる」「(さ)せる」の挿入(insertion)可能なものを文法的複

9) 森山(1998)は、「きる、あげる、とげる」のようなものを中間的という。これらは意味的にはアスペクト的であり、統語論的と見られる一方、その結合の仕方はかなり語彙的なものである。完全に統語論的なものでもないので、半統語論的複合動詞ということができる。

合動詞 (grammatical compound verbs) といい、動詞と動詞の間に文法的要素の挿入の不可能であるものを語彙的複合動詞 (lexical compound verbs) として規定できる。よって、「(ら)れまくる」も動詞と動詞の間に文法的要素の挿入が可能なものと不可能なものが同時に存在している中間的複合動詞とみなすことができる。

(15) 先頃、うなぎ屋に入ったら、うなぎ屋のおやじさんが、常連客を相手に大演説を **ぶちまく**っていた。(新)

(16) マシガンに **うたれまく**って、**地雷踏まれまく**って、、、そいでも、みんなどうにか、生きてくわけさ。(ロ)

「まくる」は(15)「ぶちまくる」のように文法的要素の挿入が不可能な場合と可能な場合(16)「踏まれまくる」があることが分かる。中間的複合動詞であると考えられる「だす」「きる」「つくす」「まくる」を通して本動詞、前項動詞¹⁰⁾、後項動詞を調べていくとある程度輪郭が見えてくる。本動詞、複合動詞を関連づけて調べるのは相互關聯性の問題もあるが、語彙的複合動詞であるか文法的複合動詞であるかを明確に區別するための有効な手がかりになるからである。両者共に二つの性質を共有しているとすれば中間的複合動詞として取り扱うのに無理がないことになる。このように、動詞研究もプロトタイプ (prototype: 原型) と関連する。プロトタイプというと最初に思いつくのは中心的意味である。例えば、「鳥」といえば、「雀」のような鳥が中心的のものであり、「鶏」は中心的なものとは言えない。よって、「鶏」をプロトタイプとして扱うのは無理がある。すなわち、鳥のプロトタイプは「鶏」ではなく「雀」のような鳥が中心的な鳥となる。この例と同様に「だす」動詞もプロトタイプという観点から応用できる。

「出す」動詞は基本的に「中にあるものを外に移動する」という意味から「外への移動」がプロトタイプであるといえる。また、「きる」という動詞は「紙を切る」のように「ものの切斷」であり、「つくす」は「最善を盡くす」のように「できる限りのことをする」をプロトタイプと見てよいだろう。また、「まくる」は「そでやズボンを捲る」のように「まきあげて中のものが見えるようにする」がプロトタイプと考えられる。

本動詞のプロトタイプが前項動詞、後項動詞として使われた時、どのように変わっていくのかを調べてみると、「だす」「きる」「つくす」「まくる」という中間的複合動詞の實體が分かってくる。また、逆引き辞典ではどのように取り扱っているのかを調べるのも役に立つだろう。

10) 「日本語基本動詞用法辞典」ではいろいろな文法情報を提供しているが本動詞、前項動詞、後項動詞との關聯性に關しては言及していない。複合動詞の前項動詞と關聯するものだけでなく後項動詞も一緒に提供すれば、より有益な情報になるであろう。

- (17) 私は鳥の行水を終えると彼女は男物の下着を一組出してくれた。
 (18) 厚生省は、調査に力を出しきった だろうか。(天)
 (19) 新大統領の就任演説で新しい夢を 打ち出した。(天)
 (20) それは「世界文學」の對象であつた西洋の中で、「ワールドフィクション」というものが言われだしたからである。(日)

(17)「出す」は本動詞の意味用法であり、プロトタイプが「外への移動」であることが分かる。(18)は一つの固まり表現として抽象化されて使われているが、基本的には移動の意である。(19)も接頭語的に使われ、一固まりの語彙的な性質ではあるが「だす」の基本的意味から抽象化されていることが分かる。(20)は文法的に使われた一固まりではない文法的性質の複合動詞であり、「出す」の意味も移動ではなく「開始」であることが分かる。(19)(20)から分かるように同一の後項動詞「だす」であっても語彙的な一固まりの複合動詞(19)と文法的性質の複合動詞(20)があるということが分かる。逆引き辞典では「-出す」について129語の複合動詞が載っている。意味分類はされていないが、語彙的に使われた「引き出す、切り出す」類と文法的に使われた「浮かれ出す、泣き出す」類を共に載せている。

- (21) 韓國人はハサミでキムチを切っている。
 (22) 山から木を切り出す。
 (23) どんな手段でもかまわないといいきった。(さ)
 (24) もっとも、モダリティをこのように規定するにしても、モダリティ的な表現のすべてがこれにつき、規定されきるわけではない。(モ)

(21)の「きる」から分かるように本動詞では基本的に中心となる意味は切斷であることが分かる。また、(22)の「切り出す¹¹⁾」は木材などを切って運び出すという意味から分かるように「切斷」である。(23)は自信を持ってきっぱりと言うという意味であるが、抽象化されていて、「切斷」の意味が稀薄である。性質も一固まり表現であるので語彙的な性質が強い。(24)は「完全に規定される」という意味で終結の意味に近い。二つの動詞が緩い構造で成り立っている文法的性質の複合動詞であることが分かる。よって、同一の後項動詞「きる」も前項動詞の性質によって文法的な機能は異なるのである。逆引き辞典では「-切る」について83語の複合動詞が載っている。ここでも意味分類はされていないが、語彙的性質のものは「踏み切る、張り切る、決まりきる」などがある。一方、ここでも極

11)「切り出す」は文の流れによって意味が異なるので注意する必要がある。例えば、「話を切り出した」は話や相談などを言い出したという意味で使われる。

めて曖昧な文法的性質を持つ複合動詞は載っていない。その代わり音便によって変化した「乗っ切る・乗りきる」「引ききる・引っきる」などが載っているのは特異な点である。このように文法的性質、語彙的性質は辞典で見分けるのはきわめて難しい。二つの動詞が二分できるか否かという基準で區別するのも一つの重要な手がかりになるだろう。

(25) 仕事をするとき、日本人に悪く思われぬようにいつも **最善**をつくしている。

(26) この間、大豊は黙って **立ち盡く**している。(日)

(27) 黙って突っ立っているだけのさりげない表情にも、**計算されつくした**演技があるのだろう。(天)

(25)「つくす」は基本的な意味が「出来る限りのことをする」という意味であり、本動詞として使われているが、「つくす」が前項動詞として使われているものはない。

(26)は「續ける」の意味であり、(27)は「完全に」の意味である。後項動詞として(26)(27)のように使われているのが特異な点である。(26)のように後項動詞にも一固まりの場合と(27)のように文法的性質で使われている場合に二分される。逆引き辞典では「-つくす」について13語の複合動詞が載っている。ここでも意味分類はしていないが、「うちつくす、押しつくす」のように一固まりの複合動詞と完遂の意味で使われている「しゃべりつくす、かせぎつくす」などを載せている。次は「まくる」について述べてみたい。

(28) ズボンのすそをまくって川を渡る田中さんの子供はすごい。

(29) 37、8歳の男がワイシャツの腕を**まくりあげた**。(愛)

(30) 星野「わかった。お前第二試合も行こう」

今中「やらせてください。**なげまくり**ます」(新)

(31) こっちだって**踏まれまくり**。だいたい、おれは人に干渉されるのが、大嫌いな。(ロ)

(28)の本動詞「まくる」と(29)の前項動詞「まくる」は「まきあげて中ものが見えるようにする」というプロトタイプの意味で使われているが、(30)(31)は(28)(29)とは異なり、後項動詞「まくる」は前項動詞を強調して使われている。したがって、後項動詞は本動詞(または前項動詞)とは異なる性質のものだといえる。「まくる」は前項動詞を強調したり、動作を休みなく、盛んに行う様子を表しているのである。しかし、「まくる」は主に人の行動に使われるので頻繁に使うとイメージが悪くなったり、マイナス評価¹²⁾を受けたりする可能性がある複合動詞である。こうした本動詞、前項動詞、後項動詞との相互關

12) 「まくる」と「たてる」のマイナス評価と意味用法については姫野(1999)があり、文法性と語彙性については李(2001)で詳しく述べている。

聯性についての研究は山梨(1995)で指摘されている言語の経験的な基盤とイメージスキマで論じられているものと關聯づけられる。本動詞、前項動詞、後項動詞を一つの器のスキマと概念領域の擴張という包括的な概念から物理的、心理的、空間的移動という観点から論議されているものと相通じていると言える。上述した「まくる」は逆引き辞典では「だす」「きる」「つくす」より使用例が少なく、11語の複合動詞が載っている。逆引き辞典にあまり載っていないのは文法性性質が強いという可能性がある。つまり、文法性の強い「はじめる」「すぎる」などが辭書に載っていないのと關連があると思われる。

4. 文法性と語彙性を共有した中間的複合動詞

先行研究で中間的複合動詞を明確に區分することができなかった理由は前項動詞と後項動詞の間に文法的要素(受動と使役)の機能が「開始」類では探すことができたのであるが、「終結」類では探すことができなかったからである。より具体的に例文を舉げて述べていく。

- (32) それは「世界文學」の對象であつた西洋の中で、「ワールドフィクション」というものが言われだしたからである。(日)
- (33) クーラーで冷やされきつた身体のまま直射日光を浴びなければならぬ不快感。(來)
- (34) 黙って突っ立っているだけのさりげない表情にも、計算されつくした演技があるのだろう。(天)
- (35) こっちだって踏まれまくり。だいたい、おれは人に干涉されるのが、大嫌いな。(ロ)

「だす」「きる」「つくす」「まくる」のようにいままで明らかにされていなかった複合動詞に文法的性質があるということが(32)–(35)の例で立証できた。反面、これまで語彙的複合動詞として扱われてきたものと文法的複合動詞として扱われてきたものが共に現れた場合、これらをどう扱うべきかについてはまだ議論されていない。両方の性質を共有しているものを中間的複合動詞とみることも可能である。この説が妥当(adequate)であるかどうかを検証するにはChomsky(1965)の客觀的妥当性に照らし合わせて調べることができる。客觀的妥当性というのは記述の方法に合理性があるか否かを調べる方法である。また、説明的妥当性とは、記述の方法が説明されているかいないかというものである。すなわち、記述方法の合理性は本動詞、前項動詞、後項動詞との相互關聯性から關連づけられる。説明の妥当性には基本的に有標性(markedness)という観点がある。これを無標(unmarked)と有標(marked)に分けて、敘述すれば検証の効果が高いと言える。無標とは相對的に頻

度が高いことをいい、有標とは頻度が少ないことをいう。よって、頻度が少ないので別の印をつけて表示しておくことが有標である。すなわち、用例が多くないので表示しておいた(29)–(32)を有標とみることができる。したがって、Chomsky(1965)のいう客観的妥当性を關聯させることによって有標の一種である 中間的複合動詞¹³⁾を文法的複合動詞の中に含めることができるのである。しかし、明確に糾明することが難しい「もたせかける」「浴びせかけられる」「もたれかけさせる」「あわせ持つ」なども存在しているので、これらも明らかにするためにはもう少し具体的なtest frameの設定による検証が必要である。

5. まとめ

複合動詞研究はごくわずかな動詞意味の研究から廣範圍な文の研究にまで擴張されている。以前は語構成の研究、意味用法が主な研究内容であったが、最近 は同一の複合動詞であっても文中で把握すべきであるという点や、形態的結合が同一であっても文法性の有無の問題など新しい局面を迎えている。上級の日本語學習者が増えるにつれ辭書に載っていない複合動詞の處理と文法性を有する複合動詞を理解するために複合動詞の研究意義があると言える。

その中でも文法性を有する動詞と語彙性を有する動詞を區別する必要性に加えて語彙性と文法性を有する複合動詞が存在する事実を知る必要がある。また、前項動詞がどのような後項動詞と結合することができるかを明らかにする作業はきわめて重要な手がかりとなる。その前段階としての複合動詞の根本的な研究は複合動詞と本動詞との關聯性を明らかにする作業が何より重要である。例えば、文法的に構成された動詞であれば辭典に登録されていないはずである。これまで調査した中間的複合動詞の特徴とカテゴリーについてまとめてみると以下ようになる。

- (1) 複合動詞には文法的なもの と語彙的なものが存在するが、文法的なもの と語彙的なものとを共有した中間的複合動詞が存在している。廣い意味で中間的複合動詞は文法的複合動詞の中で取り扱うべきである。
- (2) 文法的性質の動詞と語彙的な性質の動詞が同時に含まれている中間的性質の複合動詞には「だす」「まくる」「きる」「つくす」が挙げられるが、「まくる」を除いては「開始」と「完遂」というアスペクトの意味を持っている。これは文法的複合動詞であ

13) 森山の中間的なものは「きる、とげる、あげる、つくす、おおす」をとりあげているが、筆者は「だす、かける、つくす、きる、あげる、まくる」などである。一致するのは「きる、あげる、つくす」三つしかないが、この三つは中間的なものである可能性が高い。

る可能性が強いからである。

- (3) 「だす」「まくる」「きる」は本動詞、前項動詞、後項動詞として使用可能であるが「つくす」は前項動詞としての働きがない。
- (4) 「だす」「きる」「つくす」は本動詞、前項動詞、後項動詞においてプロトタイプが同一であるが、「まくる」は本動詞（または前項動詞）と後項動詞のプロトタイプがまったく異なる。
- (5) 用例は多くないが前項動詞と後項動詞の間に文法的要素の挿入ができる「言われ出す」「冷やされきる」「計算されつくす」「踏まれまくる」などは有標的であり、文法性の強い複合動詞である。一方、「打ち出す」「言いきる」「立ち盡くす」「ぶちまくる」などは無標的であり、語彙的性質の強い複合動詞である。このように、両方の性質を持っているものを中間的複合動詞とする。

以上のように、中間的複合動詞が存在するとともに、「終結」を表す複合動詞にも文法的要素の挿入が可能であることや多数の動詞の結合が可能であることが明らかになった。中間的複合動詞の設定と範囲が分かったのは複合動詞の實體を解明するのに極めて有効であると思われる。

【参考文献】

- ・ 影山太郎(1993)『文法と語形成』 ひつじ 書房, p.93-97
- ・ 影山太郎・由本陽子(1997a)『語形成と概念構造』 研究社出版 p.43
- ・ 影山太郎(1997b)「文法と形態論」『言語の科学』 岩波書店 p.40
- ・ 影山太郎(2002)「動詞意味論を超えて」『月刊言語』 11 岩波書店 p.22-29
- ・ 柴谷正良(1982)『言語の構造一意味・統語遍一』 くろしお出版 p.45-87
- ・ 柴谷正良(1989)『日本語學の新展開』 くろしお出版 p. 59-62
- ・ 城田俊(1998)『日本語形態論』 ひつじ 書房 p. 143
- ・ 寺田裕子(2001)「日本語の二類の複合動詞の習得」『日本語教育』 109号
日本語教育學會 p.20-29
- ・ 益岡隆志(2002)『日本語文法の諸相』 くろしお出版 p.43
- ・ 森山卓郎(1988)『日本語動詞述語文の研究』 明治書院 p.45-55
- ・ 森山卓郎(2000)『ここからはじまる日本語文法』 ひつじ 書房 p.23-24
- ・ 仁田義雄(1980)『語彙論の統語論』 明治書院 p.258
- ・ 姫野昌子(1999)『複合動詞の構造と意味用法』 ひつじ 書房 p.216-222
- ・ 山梨正明(1995)『認知文法論』 ひつじ 書房 p.103-104
- ・ 李暲洙(1996)「日韓兩語における複合動詞「-出す」と「-내다」の對照研究」
『日本語日本語教育』 8 9 日本語教育學會(日本) p.76-87
- ・ 李暲洙(1997a)「中間的複合動詞の意味用法の記述」『世界の日本語教育』 7
國際交流基金 (日本) p.219-232
- ・ 李暲洙(1997b)『日韓兩語の複合動詞に關する對照研究一文法的複合動詞を
中心に』 廣島大學學位論文 (未公開) (日本) p.205. p.247
- ・ 李暲洙(1998)「現代日本語의 文法的複合動詞의 條件과 周邊」
『日語日文學研究』 33 日語日文學會 (韓國) p.37-65
- ・ 李暲洙(2001)「本動詞와 複合動詞에 關한 研究」『日語日文學研究』 39
日語日文學會 (韓國) p.318-333
- ・ Chomsky, N.(1965) Asepects of the Theory of Syntax. MIT press
(安井稔 (譯) (1970)『文法理論の諸相』 研究社 p.36-54)
- ・ Kageyama, T.(1982)"Word Formation in Japan" Lingua57, p.215-258
- ・ Kageyama, T.(1984)"Three Types of Word Formation" Nebulae10,
Osaka Gaidai p.16-30
- ・ Miller, G. D.(1993)Complex Verb Formation,
John Benjamins Publishing. p.255-289
- ・ Tsujimura N(1999) Japanese Linguistics, Blackwell p.301
- ・ Shibatani, M.(1990) "Word Formation", The Language of Japan,
Cambridge University Press p.220-249

【用例出典】

- ・杜… 芥川龍之介(1989)『杜子春』新潮文庫
- ・天… 朝日新聞(1993)『天聲人語』朝日新聞社
- ・死… 大江健三郎(1959)『死者の奢り 飼育』新潮文庫
- ・敦… 井上靖(1965)『敦煌』新潮社
- ・ブ… 井上ひさし(1970)『ブンとフン』新潮文庫
- ・わ… 藤本敏和譯(1992)『われらの歪んだ英雄』情報文化センター
- ・知… 梅棹忠夫(1969)『知的生産の技術』岩波新書
- ・黒… 井伏鱒二(1970)『黒い雨』新潮文庫
- ・ロ… 北川えりこ(1996)『ロング パケーション』 角川書店
- ・窓… 黒柳徹子(1991)『窓際のトットちゃん』講談社
- ・愛… 源氏鶏太(1970)『愛情の悲しみ』角川文庫
- ・新… 近藤誰之(1995)『新サムライ列伝』PHP文庫
- ・さ… さくらももこ(2002)『さるのこしかけ』集英社
- ・目… 松本清張(1972)『目の壁』新潮文庫
- ・道… 三浦綾子(1981)『道ありき』新潮文庫
- ・w… 夏樹静子(1985)『Wの悲劇』角川書店
- ・モ… 仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- ・101… 野嶋伸司(1991)『101回目のプロポーズ』角川文庫
- ・廢… 原田康子(1983)『廢園』角川文庫
- ・日… リービ英雄(2001)『日本語を書く 部屋』岩波書店
- ・來… 李良枝(1992)『來意』『由熙』講談社

■ 辭 典 ■

- ・日外アソシエーツ(1992)『逆引き 熟語林』紀伊國屋書店p.282.p.724.p.786.p.1080
- ・小泉保(1989)『日本語基本動詞用語辭典』大修館書店p.166-169

要 旨

複合動詞研究はごくわずかな動詞意味の研究から廣範圍な文の研究にまで擴張されている。形態的結合が同一であっても文法性の有無の問題など新しい局面を迎えている。これまで調査した中間的複合動詞の特徴とカテゴリーについてまとめてみると以下ようになる。

- (1) 複合動詞には文法的なものと語彙的なものが存在するが、文法的なものと語彙的なものとを共有した中間的複合動詞が存在している。
- (2) 中間的性質の複合動詞 ㄹ 대표적인 なものには「だす」「まくる」「きる」「つくす」が挙げられるが、「まくる」を除いては「開始」と「完遂」というアスペクトの意味を持っている。これは文法的複合動詞である可能性が強いからである。
- (3) 前項動詞と後項動詞の間に文法的要素の挿入ができる「言われ出す」「冷やされきる」「計算されつくす」「踏まれまくる」などは有標的である。一方、「打ち出す」「言いきる」「立ち盡くす」「ぶちまくる」などは無標的である。
- (3) 「だす」「まくる」「きる」は本動詞、前項動詞、後項動詞として使用可能であるが「つくす」は前項動詞としての働きがない。
- (4) 「だす」「きる」「つくす」は本動詞、前項動詞、後項動詞においてプロトタイプが同一であるが、「まくる」は本動詞（または前項動詞）と後項動詞のプロトタイプがまったく異なる。

以上のように、中間的複合動詞が存在するとともに、「終結」を表す複合動詞にも文法的要素の挿入が可能であることや多数の動詞の結合が可能であること、「だす」「まくる」「きる」「つくす」は本動詞、前項動詞、後項動詞として使用可能であるかどうか、プロトタイプが同一であるかどうかは明らかになった。このような結果は、上級の日本語学習者が増えるにつれ辭書に載っていない複合動詞の處理と文法性を有する複合動詞を理解するために複合動詞の研究意義があると言えるだろう。

キーワード：文法的複合動詞、中間的複合動詞、語彙的符合動詞、プロトタイプ、有標的、無標的

투 고 : 2003. 2. 28 2차 심사 : 2003. 3. 22 3차 심사 : 2003. 4. 12
--

住 所: (110-791)서울시 종로구 동숭동 169번지 한국방송통신대학교 일본학과
電 話: 02-3668-4294
E-mail: kslee@mail.knou.ac.kr

K C I